

シベリア抑留記

茨城県 豊田 耕八

九月 沿海州ソフガワニ港上

陸、抑留開始

昭和二十四年七月 ナホトカ出港 大郁丸

にて舞鶴帰還

生年月日 大正七年二月二十五日

主たる抑留地 第二地区ソフガワニ

軍歴 昭和十四年三月 関東軍第三国境守備隊

現役入隊

旧満州国東安省密山県

半截河

昭和十七年四月 秋田第一一七連隊補充

隊転属、満期除隊

昭和十九年五月 水戸第一〇二連隊補充

隊臨時召集

六月 択捉独立混成第四三旅

団司令部転属

昭和二十年八月 択捉島天寧にて武装解

除

八月十四日午後九時頃、高級副官が師団司令部に行くと行って部屋に立ち寄った。何かと思いつつ時を過ぎてしていると、真夜中近い頃帰って来た。「どうにもならん、戦は終わりだ、明日正午大本営発表、天皇陛下下の玉音放送がある」と。正午を期して司令部前広場に全員集合し玉音放送を聞いた。聞き取れないところもあったが、「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」の放送は、今なお脳裡に残っている。

ソ連軍の進駐情報は入らないが、北千島守備隊がソ連上陸部隊と激戦を交わし、上陸部隊に相当の犠牲が出たとの情報もあった。

ソ連進駐軍は、占守、幌筈、松輪、得撫と占領、南下した。

八月二十五日、ソ連進駐。択捉島天寧にて武装解除。

その後は、宿舎を将校、下士官、兵と分離された。

糧秣も豊富にあり、缶詰肉等を食べ過ぎて、じんましんにかかり苦しんだ。歩哨の監視も厳しく、軍医のところに行くのに苦労した。その頃、北海道に帰還するとの命令で、日本には物が無い、品物は持てるだけ持って天寧飛行場に集結せよとのこと。公用行李も不要となり、被服類を主に荷車に積み込み、数キロある飛行場に到着した。飛行場は大混雑、棧橋がなく遙か数百メートルの沖合いに八千トンもの貨物船が停泊している。乗船間近に棧橋がなく、乗船では徒手で小舟に乗った。貨物船には船腹に縄梯子が下がっている。海に落ちないように波に乗って上手に縄梯子をつかみ乗船。従って荷物は一切持てない。雑のう、水筒、雨合羽と毛布一枚のみ。飛行場には物資の山ができた。北海道に向けて、輸送船は天寧出港。輸送船は、一夜明けて樺太大泊港に着いた。豊原の進駐軍司令官に対して帰還報告をした。戦争も軍隊も終わる。将校は

軍刀を出し、また全員所持金を出して北海道に帰ると夕方大泊を出港した。遙かに礼文島の山が見えた。

やっと安心できた。夜半に甲板に出た兵隊が「船は北へ向かっているようだ」と言ってきた。磁石を持った者もいた。やはり北のようだ。隣の兵隊は、船倉全部鉄板だ、磁石も当てにならないと楽観的。一日走り、夜半輸送船は停止した。小高い所に点々と灯りが見えた。小樽の地形を知る者は、小樽に似ていると。夜が明けて見たら小樽どころか、殺伐とした港。そこがソフガワニ港であった。上陸した我々三百人ぐらい、港より一山越えて旧ソ連囚人收容所跡に配置された。人間の住める建物ではない。老朽甚だしく、もちろん電気もなく水の便も悪い。しかし、入る建物はこれだけしかない。鮭詰めになって旅装を解いた。

作業開始は山林伐採、薪切りからで、十月に入って本格的作業に入った。十月十日、今日は機関車用薪切りで、初めてノルマの説明を受けた。朝から小雪が降っていた。昼頃、雪は一層強くなった。郷里では秋祭りの日だ。雪の中での昼食は鱈の塩漬け一尾と少量

のパン、水一杯で終わり。故郷を偲び悲哀に終わる。

十一月に入り、シベリアの冬は一段と寒気が強く
なった。その頃、上陸したソフガワニ港を見渡す高台
に収容所が移動した。主たる作業は道路工事や町の雑
役であった。ある日、ソ連の作業監督が、「お前達は
いつ帰れるかわからない。スターリンは日本に貸しが
ある、それをお前達を働かして精算すると新聞に出て
いる」と。我々は驚いた。俺達はソ連と戦っていない、
何一つ損害を与えていない、先の見えない日を迎
えた。この先どうなるかわからない。一着の軍衣、着
の身着のまままで作業している。衣類を大切に、作業
より帰った夜は毎晩、暗い灯のもとで被服の補修。針
も糸もなくなった。就寝後、一本の針は数人が申し送
り、順に補修に当たると、缶詰の缶を加工した灯油の
明かりは一時間もしたら煤けて、針の穴も通らない日
が続いた。凍傷注意。

朝起きて海上を見たら、大きな貨物船が入ってい
る。今日から貨物船の荷役作業に出る。荷物は何かわ
からない、とにかく早くおろせと昼夜兼行の作業だ。

貨物は雑穀のようだ。高粱とトウモロコシが主体で、
あとはその他の雑穀。容器は千差万別である。厳寒の
海上、夜間作業は殊の外厳しかった。倉庫は忽ちいっ
ぱいとなり、屋外に野積み状態だった。欠食の我々
には絶好の食料補給になるが、監視は厳しかった。し
かし食べないと作業が続かないと交渉したら、多少の
ポケットは黙認であった。荷物の種別、数量を確定
し、保管台帳ができると、在庫監理も厳しくなった。
作業も終わり部屋で休息していたら、作業班長以上
集合せよ、の伝達があった。何かかと思いつつ集合し
た。所長は「収容所には電気がつかず、暗くて皆も困
る。電気配線はできているが電球がない。今船が入っ
ている。明日作業に出たら、見つからないように電球
を取って来い」との指示。早速実行し、帰った。部屋
には待望の電灯がついた。貨物船を見たら半分ぐらい
電気がない。船には予備があり、夜間作業は続行でき
た。

ありがたい親心で、収容所は毎晩明るくなった。

二十一年夏頃、雑穀類と混載の中に味噌樽が入って来た。一部の樽の割れ目にはカビが生えていた。ソ連監督がこれは何か、大便に似ていると言う。私が味噌の説明をしたがわからず、捨てなさいと言うから、私は三十本ほどの味噌樽を柵外に捨てさせた。作業終了。日は長い、収容所に帰り馬車で引き取り炊事に渡し、一年ぶりに全員、味噌汁を味わった。

その頃、五千トン程の貨物船がカムチャツカ方面より入って来た。積載物は塩鮭で、梱包せず、船倉いっぱい岩塩を混ぜた状態で、毎日鮭の荷揚げに行くと塩鮭の臭いが身にしみて臭い。塩鮭でも海水に三〜四時間漬けておくと塩分が抜けて生で食べられると聞き、岸壁の海水で塩分を抜いて食べた。

燻製にすると貴重品となり、ロシア人も欲しい品物だ。午後一時頃、船の裏側に行くから降ろしてくれと頼まれる。助け合いの精神で協力、人間関係も良くなった。

今日は倉庫からの貨車積み作業。倉庫にはカザフ出身の囚人十数人が作業していた。何が貨車に積み込ま

れるかわからない。突然囚人監督が来て、手伝ってくれと言う。何かと思ったら、貨車積みする雑穀の中に白米が隠してある。「至急こちらに運んでくれ、十五袋ある」「手数料は幾らか」「一袋お礼をする」「駄目だ、二袋だ」「OK。」泥棒の手伝いをして六十キロの白米を二袋手に入れた。昼食を配達に来た炊事の馬車に積み込み、一年ぶりに白米食を食べた。在ソ中、白米を食べたのは最初で最後だった。

健康衛生管理面では、シラミが繁殖し退治の方法がない。入ソ以来入浴はない。十二月末頃か、初めて入浴、健康診断があった。入浴と言っても浴槽はない。サウナ風呂同様で裸になり、ひな段に座り上ほど熱い。そのうち汗はだらだら流れ、降りて桶一杯のお湯で体を流す。いくらこすっても皮はむけてくる。

その間、脱衣は八番線の輪にくくり、入浴中、隣の室で高温シラミ退治をするが、なかなか死なない。縫い目伝いに下へ下へと、退治は困難だった。次は、シラミの棲息部位と称して、毛の生えているところをみな剃り取った。若い女医さんの前に立って、お尻の皮

をつままれ、伸び具合で健康等級が決まる。何回受けたことか。

二十二年の春、港の収容所で二冬を越して、同一地区で十数キロ離れた収容所に移動した。一般市街の雑役作業となり、私は収容所給食係の職務についた。

収容所給与係将校も細かく監督もし、給食に力を注いだ。寒くなるにつれ病人も出た。何人かの患者を病院に送るため、寒い朝、毛布に包み雪橇に乗せて見送ったが、再び帰った人は見なかった。

給食係の頃、糧秣受領は最重要な日課である。糧秣配給所長は温厚な顔つきで、私もよく尽くした。

ある日、私に手紙を見せて、これはモスクワの父から来た手紙だ、父は日ロ戦争で捕虜になり日本に行った、日本人は親切によく扱ってくれた、今お前は日本人捕虜に食料を配給する仕事についている、俺がお世話になったお礼を返してくれと書いてあると話して、小麦粉三十キロ入り三袋を皆で食べてくれと言う。私は涙して戴き、皆に報告した。間もなく休暇でモスク

ワに行つて来ると言つて別れたが、再度会うことはなく終わり、残念至極。再会したい人だった。

二十三年秋、待望の日が来た。いよいよ祖国日本に帰れる。着の身着のまま、何の荷物もない。出発準備は早い。ソフガワニを出て一晩走ったら下車の命令。殺風景な駅だった。駅に近い収容所に入れられた。今調べて見ると、コムソモリスタ経由、北上してホルモ

リン地区であった。本格的冬期の伐採準備作業に入る。今冬期伐採地区搬出路の間伐作業、山林は比較的平坦地で湿地もある。しかし立木は直径三十〜四十七センチもある巨木が林立している。作業は今冬期伐採材搬出路の建設である。鉄道より四キロもあつたか、幅十メートル位の大木を低く切り倒しておく。一カ月位で積雪は七十〜八十センチになり、それが氷結すれば立派な氷の道路となる。春、氷が解ければ不通。

酷寒の深夜、闇夜の木材積み込み作業。抑留中、この作業ほど死と対面した危険な作業はなかつた。伐採作業は昼間のみ。山の中に広い木材集積場をつくり、

多勢の人馬で伐採集積が行われた。

鉄道までの搬送は、トレーラーが限られており、日中だけでは搬送できず、夜間も連続積み込み作業である。直径四十〜五十センチもあり、長さ五、六メートルの丸太を高い台車に六段積み上げる。輪棒丸太を斜めに渡し、力を合わせ転がし上げる。木材は凍ってコンクリート柱と同じ。力が合わないと落下する。夜間作業である。月の明かりがあれば少しは明るい、闇夜の晩は真っ暗だ。気温は零下四〇度ぐらいに下がっている。周りに焚き火をして焚き火の明かりで積み込む。運転手もノルマがあり、休まない。寒さ厳しく防寒服を着用。体力もなく、靴の雪も凍って足に力が入らない。木材と一緒に滑り落ち怪我人も出る。全く悲惨この上もない作業であった。

伐採搬出作業に代わって道路拡幅作業に出た。百人ぐらい。収容所より四キロもあったが、数日後、作業の帰路、一生懸命歩いても一番最後になる。月例身体検査の結果、三級となる。営内作業で便所の汲み取りをしていた。汲み取りと言っても、舎外の便所は太い

丸太を半面平らにした二本橋である。大便は一メートルの氷の山になっている。金棒で碎きスコップで外に投げ出し、橋に積み込み野外に捨てる。作業中にはおいを感じないが、部屋に入ったら服に飛散した糞水が解けて臭くなり困った。

次の日、鉄道踏切番に出た。収容所に近い踏切だった。小屋もない望遠のきく踏切だ。風の吹き通しは最高で、どうして寒さを凌ぐか。汽車の通過時刻表もない。汽車が遠くに見えたら監視する方式だ。まず暖房が先決。道路近くに大木の枯根がある。凍った道路を押し来て暖をとる。遙か遠く機関車が見える。この次いつ来るかわからない。二十四時間勤務で吹きさらしの踏切、休みなし。三百メートルぐらいのところ、駅の貨物ホームがあった。行ってみたら馬鈴薯がおろしてあった。腹が鳴る、少し戴くか、しかし見つかっただらどうか、帰れなくなるか。心配しながら戴いた。焚き火で焼いて腹いっぱい食べて、帰りに焼いた袋に入れて持ち帰り、戦友に配って喜ばれた。そんな日が続いているうち、体力も逐次回復に向かった。

二十四年春五月、再びダモイと言われ列車に乗った。前回同様コムソモリスクで降ろされた。帰還調整とか言いつつ、暖かくもなり気分的に楽になった。アムール河を上り、碎石収集作業に出た。河を走ること久しく、河岸は山にかかり、碎石搬出現場があった。三隻で碎石積み込み、一生懸命働いた。歩哨が魚を捕ると言う。爆破用火薬がある。火薬を小さく紙袋に縛り導火線をつけ点火、水中に投げ込む。魚が沢山浮上する、下から回って掬い上げる。早速船中にてフライにして食べた。フライパンも油もあったことから、歩哨の計画的恩恵で作業成績も上がり、抑留四年働いて初めて金十五ルーブルを戴いた。

コムソモリスクで二カ月間作業し、七月中旬、帰還命令でナホトカに向け出発した。ナホトカは帰還者で各収容所とも満員のようであった。帰還コースの四収容所を回り、七月二十日舞鶴入港の大郁丸にて祖国日本の土を踏み、故郷の山河に迎えられ帰宅した。

平成十一年度シベリア墓参慰霊訪問団に参加し、八

月二十八日、ハバロフスク市インツォリストホテルに近い土産物店にて、管理人に「抑留四年、ラポートをした」と話したら、見せる物があると案内してくれた。沢山の抑留記録、スターリンへの感謝決議文など。その中にただ二枚の写真があった。昭和二十四年七月二十日舞鶴入港の大郁丸と英彦丸、同日ナホトカ出港の写真があった。奇遇だ。売ってくれと言ったら売れないと言う。これは資料に使う人に有料で貸すと言う。では写真に写させてくれと頼んだが駄目だと言う。私の乗船していた大郁丸、記念すべき大きな土産を買い損ね、帰って来た。

「異国の丘」 故吉田正先生を偲んで

戦後の国民的作曲家、吉田正先生は日立市の出身で、日立製作所工業専修学校を卒業し、昭和十七年従軍し満州派遣となり、戦後シベリアに抑留された。抑留中作曲した「異国の丘」のメロディーは、悲惨なシベリアを偲び一世を風靡した。惜しくも平成十年六月他界されたが、抑留地を調べたら、終戦時、第一一二

師団歩兵第二四七連隊に所属、抑留地は私と同じソフガワニだった。共に三年ソフガワニに抑留生活を送りながら、生前お会いする機会のなかったことを非常に残念に思う。

シベリア抑留体験に思う

千葉県 伊橋 芳二郎

戦後早くも五十余年、あの広島に次ぐ長崎に原爆が投下された八月九日、ソ連が突如満州に侵攻してきた。満ソ国境付近においては、全線にわたり苛烈な戦闘が展開され数多くの犠牲者を出した。日ソ不可侵条約など、いざというときは何の役にも立たないものである。

最前線にいた私達の部隊は戦線を縮小し国境西方の方正県方正に集結した。八月二十日に終戦に伴う関東軍の命令に従い、無念にも戦うこともなくソ連軍の武装解除をうけた。武装解除といっても、現地において

はそう簡単なものではなかった。数は少なくとも関東軍最後の一兵まで戦い抜くんだといきりたつ将兵もいた。また、既に終戦を耳にし、事ここに至っては止むなしとする隊員も多く、命令の徹底に日本将校が怒号する一幕もあった。こんな最中に数人のグループが現地逃亡をしようなど事態は險悪をきわめた。

武装解除は、部隊將兵全員の階級章と軍刀、銃剣全部を取り上げ、畑の片隅に積み上げられてしまった。残ったものは各人毛布一枚と飯盒、水筒だけの全員身軽な兵隊となってしまった。この様相は、一転無残、誰しも言葉にならなかつた。かつての「生きて虜囚の辱めを受けず」といった戦陣訓もどこかに消え去り、心境複雑なるものがあつた。

私達は、たとえ武装解除をうけても関東軍である、このまま現地邦人を見殺しにしてよいものか、何か打つ手はないかと、呵責の念にかられ、互いに話し合つたが、そんな命令など出る訳もなかつた。

まさか日本が負けるとは考えもしていなかつたが、これで何とか死なずに日本に帰れると誰もがまつたく